

浄土

四月號

新興宗教
特集

早春の大佛

星野立子

釋尊誕生の喜び

大野法道

ギリシヤ人と念佛

中村元

山櫻の咲く頃

吉田絃二郎

新興するもの

今年四百年祭を迎えるフランシスコ・ザビエルは、日本にはじめてキリスト教を傳えた人であるが、彼が日本にきたとき、「これこそ神の教えを受ける世界で一番の國だ」といつて喜んだと傳えられている。彼のこの言葉は、キリスト教にとつて未開拓な處女地としての日本への宣教の喜びというよりは、その當時の日本の人たちが、この新しい宗教を受け入れるだけの、既に高い宗教性をもっていることを言つたもので、ザビエルはそおした日本への宣教に大きな喜びを感じたのである。

このような熱烈な異邦の基督者を感嘆させた日本人の宗教的な高さ、そのような基礎を培つたものは何であつたかと言へば、それは鎌倉時代の新佛教であつた。日本の宗教改革といわれる鎌倉佛教がもっている宗教としての高さ、深さ、それが當時の日本人の信仰を育てゝ來たのである。しかも考えれば、法然上人の淨土開宗をはじめ、親鸞、日蓮、道元などの運動は、明らかに當時の新興宗教であつた。しかしこれらは、現在のいわゆる新興宗教が看板にしている病氣を癒すとか、物質的幸福が得られるとか、性の問題だとか、そおいうところを完全に超えたものであり、本ものゝ宗教である。

戦後の流行語「新興」はお粗末な、ラフなものゝ代名詞にも使われている。そのようなところからは、眞に日本を新興させるものは現われない。私たちは何故このような變態的な新興が現われるかを反省するとともに、正しい信仰の生活を、自他ともに高め深めることによつて、眞に「新興」の道をみさだめる必要がある。(藤田寛雅)

目次

ギリシヤ人と念佛……………中村 元(1)

釋尊誕生の喜び……………大野法道(8)

山櫻の咲くところ……………吉田絃二郎(6)

早春の大佛……………星野立子(5)

特 新興宗教を語る……………楠 正俊(17)

正しき信仰へ……………中村康隆(15)

集 迷信の科學……………竹中信常(11)

芝園だより

ギリシア人と念佛

文學博士 中 村 元

佛教の宗教的實踐の中心が念佛の行であるということが出来るならば、全然別の文化的世界に生育したギリシア人が、念佛に關して、どのように考えたかということを明らかにするのは、われわれにとつて興味ある思想史的課題であるといふことができるであらう。

り、『那先比丘經』という名のもとに二種傳はつてゐる。いまこの書のうちで、念佛に關する論議を検討してみたい。

現實の人生は苦しみにみちたものであり、たといわれわれがそのことを自覺していなくても、われわれの氣づかぬうちに苦しみが準備されてゐるということを、佛教徒は主張したのであるが、それは決してわれわれが絶望的状況のうちに閉ぢこめられてゐるということを意味してゐるのではない。かえつて、われわれの爲した惡をも、宗教的な功德によつて消却することができると考へてゐた。

この問題についてメナンドロス王は質問を發する。

『尊者ナーガセーナよ、(善を行つた果報としての)福 (punya) と (惡を行つた果報としての) 禍 (apunya) とではどちらが大きいのですか?』(八三頁) ナーガセーナは答へてゐる。『大王よ、福がより大きく、禍は小です。』

『何故ですか?』(八四頁)

『大王よ、禍をつくり出す者は、「わたくしは悪い行いをし

アレクサンドロス大王が西紀前三二六年にインドに侵入して以來、インドとギリシアとの文化的交渉が開けたのであるが、西紀前二世紀の後半には、西北方のバクトリアからギリシア人であるメナンドロス王がインドに侵入して來て、大帝國を建設した。かれが個人的には佛教を信奉するに至つたらしいことは、種々の事實から知ることが出来る。かれを佛教に歸せしめたのは、當時傳統的保守的佛教に屬した長老ナーガセーナ(那先比丘)の努力によるといふが、かれとメナンドロス王との對話が、パーリ語で『ミリンダ王の問い』という書のうちに傳へられてゐる。『ミリンダ王』とはメナンドロス王のパーリ語名である。これの漢譯もあ

た一と思つて後悔する。それ故に悪は増大しない。大王よ（しかるに）福をつくり出す者は後悔することがない。後悔することのない者には愉悅が生じる。愉悅の生ずる者には喜びが生ずる。心の喜べる者は、身體がやすらかである。身體がやすらかである者は、安樂を感受する。安樂なる者は、心が統一する。心の統一した人は如實に理解する。この理由によつて福が増大する。大王よ、（罪を犯し、刑を受けて）手足を切斷された人でも、一束の蓮華を世尊に捧げたならば、九十一劫の間（地獄などのごとき）墮處に赴くことがない。大王よ、この理由によつて、わたくしは「福はより大であり、禍は小である」と語るのである。³⁾

右の討論についてみると、けつきよく人間は善の方へ赴く可能性が大きいのであり、人間の究極の運命については極めて樂觀的に考えていたといひ得るであらう。これはインド思想が、厭世思想を説くにもかかはらず、究極においていちぢるしく樂觀的であるという特徴に對應するものである。またインドの戯曲には、ギリシアのそれと異つて悲劇がないという事實ともあはせて考えるべきであらう。

ところで宗教上の功德のうちでも一般世俗人のために特に重視されるのは、佛を念ずることである。後世の佛教、殊に淨土教においては、念佛ということが特に最も肝要な宗教的修行であると見なされるのであるが、このよ

うな思想の萌芽はすでにこの時代にあらわれている。

『尊者ナীগセーナよ、あなたがたはこのようにいはれます。——「たとい百年間も惡を行つても、臨終に一たび佛を念ずることを得たならば、その人は天上に生ずることができるであろう」と。わたくしはこのことを信じません。またあなたがたはこのようにいわれます。——「一たび殺生を行つても地獄に生れるであろう」と。わたくしはこのことをもまた信じません。』（八〇頁）

そこでナীগセーナが反問する。『大王よ、あなたはどうか考えになりますか？ 小さい石でも船なくして水の上に浮ぶでせうか？』

『尊者よ、さうではありません。』

『大王よ、百の車に積むほどの石くづでも、船に載せられたならば、水の上に浮ぶでせうか？』

『尊者よ、さうです。水の上に浮ぶでせう。』

『大王よ、善業はあたかも船のごとくに見なさるべきであります。』

（『船の中の百枚の大石は、船によるが故に没するを得ず、人、本の惡ありといへども、一時にても念佛せば、ここをもつて泥梨（＝地獄）の中に入らず、便ち天上に生ず。』船によらずして直ちに水の上に置かれたる）その小石の没するは、人が惡をなし佛經を知らずして、死してのち便ち泥

右の討論においても、善業の力は惡業の力よりも大きいと考えていたことが知られる。ここにもインド人の樂觀的見解が認められる。また淨土教と連關をつけて考える場合に特に注視すべきこととしては、念佛の行いを善業の一つとして考えているのであり、善惡の對立を超えたものとは考えていないようである。

なおここには「易行道」の觀念の萌芽が存すると考えられる。後世の龍樹の主張したところによると、佛教には「難行道」と「易行道」とがある。⁵⁾「難行道」すなわち行き難き道とは、自己の修行によつて究極の境地に到達する修行である。それは陸路の困難な歩行に譬えられる。これに對して「易行道」すなわち行き易き道とは、ただひとへに佛を信ずるといふ安易な修行である。それは水路を舟に乗つて進むようなものであるという。さうしてかれは特にあみだ佛を信ずるといふ易行道の實踐を説きすすめた。佛を念ずることを船に乗ることに譬えるという點で、ナーガセーナの主張は、龍樹のそれと一脉相通するところがある。龍樹の易行道の教説は、後世の淨土教においては重要な意義を有するものとなつた。

(3)

ところでただ佛を信じ佛を念ずるといふただそれだけのことによつて、生死罪惡の凡夫がすくはれるという教説は、

ギリシア思想には存在しなかつたといつてよいであろう。ギリシア人は多くは現世における調和と美とに意義を認めていたのであつて、生死罪惡の凡夫というような宗教的意識に乏しかつた。かれらが重視したところのものは知慧の獲得である。これは、ギリシア人の間では、インド人におけるように宗教的な意味における罪障の意識が深刻でなくその感じが鋭敏でなかつたことに由來するものであらう。なるほどギリシア人の間では、人倫の理法にしたがはうとする道德意識は相當にいちぢるしかつた。あえてソクラテースの實例をまつまでもないであらう。しかし、人間のうちに存する根源惡というものについての自覺と、絶望の深淵に開かれる大慈悲の光明とは、かれらに縁どほいものであつた。したがつてギリシア人のメナンドロス王が、佛を信ずることによる救いという觀念に向つて質問の矢を放つたことは、けだし當然であらう。

しかし佛教が問題とするのは、客觀的自然ではなくて、人間の主體的自己のありかたそのものである。主觀的心情としては惡から離脱しようといかに努めても、なおどうしても惡から脱することのできない人間、——それを救うものは、絶對の慈悲である。それは人間のものでありながら、しかも人間を超越している。それは人間社會における善惡の對立とは次元を異にするものである。人間社會の道德觀によるならば、念佛は善という部類のうちにさめる

べきものであるがどうかは解らないし、また虫けらを殺すことは決して悪ではないであろう。しかし宗教的見地からみるならば、前者は善であり、後者は悪である。

さうしてこの念佛に對應してあらはれる慈悲によつて、いかなる悪人でも善人と同様に救はれる。さればこそ、救いとらせる大慈悲は、佛のかたより下されるもの、無量の光明、として、われわれ人間に表象されるのである。

(1) トレンクナー出版本による。

(2) かかる文句は定型句としてパーリ聖典のうちにあらわれる。(e. g. Vinaya, Mahā vaggā VIII, 15, 13)

(3) 『ミリンダ王の問』二九〇頁でも、『善と不善とどちらが大でどちらが強い』という質問に對して、『善のほうが大きい』と答えている。

(4) 大正藏、三二卷七〇一頁下。

(5) 『佛法に無量の門あり。世間の道に難きあり、易しきあり、陸道の歩行は則ち苦しく、水道の乗船は則ち樂しきのごとし。菩薩の道もまたかくのごとし。或いは勤行精進のものあり、或いは信という方便なる易行を以て疾く阿惟越致地(＝不退轉の境地)に至る者あり。』

(『十住毘婆沙論』易行品)

科學と宗教

「神は一切の眞理の源である。故に科學と宗教との闘争はあり得ない。若し闘争ありとするならば、その科學の結論が未熟なのである」これがキリスト教の解釋である。理論の世界では「神と云ふものがありとするならばかくあらねばならぬ」と云ふのが、信仰の世界では「神は存在してかくの如き屬性を有す」として與へられ信じられる。この飛躍は何によつてなされるか。また何によつて正當づけられるか。これは宗教家の體驗によつて補充されるより外ないが、この場合非科學的獨斷が附加されないだらうか。これにいたる根本的な悩みは科學が進歩しない如何なる段階に於ても人間は宗教を必要とするに云ふ事實からくる。故に科學と矛盾しない宗教はその教理が科學の進展と伴に進歩し得る教で而も如何なる知識段階に於ても不變不昧の眞理を中心としている宗教でなければならぬ。覺りと應病與藥の立場と態度をもつてゐる佛教はこの種の宗教でないだらうか。

(松 濤)

紹介

中村元氏は文學博士・東大教授

星野立子氏は俳壇の巨匠たる高濱虛子氏の息女、女流俳人の第一人者、俳誌「玉藻」を主宰されている。

草樹會は往年の東大學生俳句會で、今では俳壇の一方の雄たる社會的知名人の集まりで、虛子氏を中心としている。

佛 大 の 春 早

子 立 野 星

二月の半ばといふのに、うら／＼と暖かな晴れわたつた日であつた。

今日の俳句會場、大佛殿の廣い庭芝にもぬく／＼と日が満ち／＼てゐた。みな思ひ／＼にそのお庭や境内に散つて一時間餘を俳句に過した。

柔かき春の日影の屋に満ち

虚子

大佛様を近くに立つて仰いだ時に青空にのし現れた御姿を大變大きく感じられた。少し前かゞみに、そして半眼の御目のあたりに少し蔭が出来て……

み佛の襲に流るゝ春日影 虚子

お膝のあたりの柔かな感じがこの句によく現はれてゐると思ふ。

そして、このやうな風景もあつた。

遠足の列一とめぐり大佛

さき程、私等がこの大佛様に向つて長谷の通りを觀音堂の四ツ角にまで来て、右に曲つて歩いて來た時、その晴れた大空に、もく／＼と白雲が盛り上るやうに浮んで見えた。全

くあの眞夏の雲の峰と同じであつた。

「もう雲の峰が立つてゐる」

と話し合つた。そして境内にみな散つて、寫生にかゝつた折には、私は早やその雲の峰は忘れてしまつてゐたのに、

大佛より立ちのぼる雲の峰

虚子

大佛の顔見て春の空を見て

虚子

といふやうな俳句が讀み上げられ、あゝさうであつた、と感じ入つた。

この冬は暖かであつたといふものゝ、やはり長い冬を過して來た山々や境内の草木は、春になつたきざしを本當に正直に受け、うごめくやうに躍動しはじめてゐる。枯色の草に吹く風も光り、大佛様に射す日さしもやはらかく、石疊の上に點々とある落椿も、鶯の椿の花の蜜を吸ふ様子も……何も彼も暖かなよろこびに溢れて見えた。

傍の簀にふと春の風

虚子

あまり強い風も今日は吹かない、と思つてゐたのに、ふと佇んでゐる自分の身近の簀がざわ／＼と動いた。そうだ、此處にも春風がもう吹き始めてゐた、とその時に如何にも、もう春であつた、と作者の軽い心の驚ろきをこの句に見ることが出来る。



山櫻の咲くころ

吉田 絃二郎

一ヶ月前わたくしは市川幸四郎丈の死について書いたが、今朝の新聞は澤村宗十郎丈が姫路の旅興行先で急逝したことを報じてゐる。つい數日前東京三越座で紙治を演じて、放送されたばかりであるだけに一層感慨の深いものがある。宗十郎といふ人も亦きはめて謙仰の徳を具へた人であつた。ずゐぶん氣の毒なくらゐの端役でもおとなしく引受けて投げることなく演じてゐた。餘り氣の毒に感じて、いさゝか臺本のセリフを書き足して上げると、わざわざ丁寧な挨拶を述べられるので、わたくしの方で恐縮したことも二三度あつた。紙治のやうな近松の心中物をあの老齡で演じ得る役者といつては、東西の劇壇を通じて、今ではあの人一人だと思はれてゐたに惜しいことである。しかし役者としては舞臺の上でたほれたことであり、御當人も満足であつたらう。

文樂の團平は古今の名三味線弾きであつた。金錢に淡泊で、謝禮として受けた錢は紙に包んだまゝ紙屑籠に放り込んで置いた。年の暮になると出入りの商人たちがや

つて來て、紙屑籠の中から勘定だけの金をつかみ出して受取つて行つた。有名な「壺坂」は團平の女房の作だと傳へられてゐるが無論團平なくては出來ない作である。團平はいつも口癖のやうに「藝人は舞臺が戰場である。わしは舞臺で死ぬ」と言つてゐたが、その悲願通り、舞臺で土佐太夫の金毘羅靈現記の三味線を弾きつゝたほれてしまつた。

由來東洋には金錢に淡泊な潔癖を持つた人が多い。釋尊の感化がはたらいて居ることは申すまでもない。

日本人は釋尊の教義については知ることが多いにして、悉達太子が王城を捨てゝ雪山に苦行せられたといふことだけは知つてゐる。しかもこの一事實がどれほど深く日本民族の心を作り上げるに根本的な役目を果してゐるか知れない。

しかも釋尊は八十歳の高齡を以て、阿難たゞ一人を伴れ、南方へ道を説くために旅をせられ、やがて北方祇園精舍へ歸らるゝ途上拘尸那城のほとり沙羅双樹の間に般

涅槃に入られた。この一事實がまたいかに強く日本民族の心を培うたか知れない。西行、芭蕉の一生はその片鱗の模倣であつた。西洋に「基督イミテ・シ・キリストの模倣」といふ本があるが、西行も芭蕉も佛陀イミテ・シ・ブツの模倣である。

洛北鷹ヶ峯の光悦は一生算盤を手にせず、量目を秤るすべを知らなかつた。圓平も光悦も釋尊の模倣に生きた人である。

とはいへ西洋にも基督の模倣に生きた人々がある。アシシのフランスは貴族大富限者の子として生まれ、一朝悟る處あつて、黒衣繩帶の人となつた。近代ではイギリスの將軍として埃及スーダンの地に三百十七日の間援軍を待ちつゝ孤城カアツームに死んだゴルドンがある。

清朝のために長髮賊を平ぐるや、清の皇帝は數萬兩の恩賞を賜うてその功に報いんとしたが、ゴルドンは辭して一厘も受けずして英國に歸つた。當時のゴルドンの心境を語る家信がある。

「私は官位の昇進や世の評判などは塵ほどにも思はず候。貧にして中國に來り、貧にして中國を去るべく候。」

このゴルドンの東洋的な潔癖さは宗教から來てゐる。かれは青年士官時代から宗教書や聖書を手から離さなかつた。中國から歸り、六年の埃及スーダン總督の任を果したかれは、まる一年の間エルサレムの遍路生活を送つた。かれはスーダンの總督たらんよりも、むしろ一貧僧

としてエルサレムの遍路たらんことを欲した。「余はわが宗教を愛す。宗教はわが大外套である」とはゴルドンの言葉である。ゴルドンの五十二年の生涯は宗教の大外套に掩はれてゐた。

武人ゴルドンのキリストに於けるわが熊谷蓮生坊の法然上人に於ける信仰に酷似せるものがある。

故郷の山には山櫻の咲くところである。さまざまの櫻があるが、山櫻の楚々淡々たるにまさるものはない。西行法師ではないが、半ば世を捨てたつもりでゐても山櫻の咲くところになれば、生きのびていつまでも花を見たいと思ふ心になる。

山櫻が咲くところは野には翁草の花が咲き、赤い茱萸あまぐさの實が果つてゐた。その四月の野の道を横切つて、灌佛會の甘茶をいたゞいて歸つて來ると山櫻が散り、雉子が鳴いてゐた。

數日前わたくしは武藏野を歩いてゐた。雨上りの畑の傍には古代人の土器の破片が見出された。そこに朝夕黒い土を耕してゐる人たちは、その破片を踏みにじつて、土器に對して何の感じも抱いてゐないらしい。わたくしは土器の破片を拾ひ上げて見た。三千年の昔の人たちが髣髴として浮かんで來るのであつた。屑々たる破片にも三千年の歴史が儼在してゐる。佛は路傍の花にも感じられるが踏みにじつてゐる人もある。

釋尊誕生のよろこび

文學博士

大野法道

人の世にめでたい事は數々ある中にも、新たに人が生れ出るめでたさは、大いに祝福すべきことである。その兩親のよろこび、一家の中は急に賑かになり、それを傳え聞く身寄りから、知己友人の誰彼れまでが、同じ一つの壽ぎの心に満たされる。まして結婚してから幾年もの間、子のないのをかこつていた家庭で、赤ちやんの、産室の空氣をつき破る、呱呱の聲のきこえた時の、親たちの心は、何とも喻えようはないにちがいない。

釋尊は西紀前五六五年、今から二千五百十五年前（衆聖點記の傳説）に、印度のカピラバスト（迦毘羅國）という國の太子として生れられた。當時の國王はスドウダナ（淨飯王）、王后はマヤー（摩耶）夫人で、國は大きくはなかつたけれども、熱帶地方の沃土に、ゆたかな文化をもつて、國力は充實し、國民はその堵に安んじていた。ただ一つ心

にかかるのは、王家に世嗣ぎのないことで、宮廷を中心に王族から國民の一人々々までが、早く王子を得たいもの的心から希わぬものはなかつた。こうしたやるせない、希願の年月をかさねるうちに、望むものを待ちわびる心は、いよいよ高まつてゆく、きつい待望に暮れる年々、そこへ悉達（しつた）太子は誕生された。これが後の釋尊である。待ちにまつた太子の出生に、國を擧げてのよろこびが、大地をゆり動かさんばかりであつたであろうことは想像するに難くない。

悉達太子は、春のさなかの四月八日に、都の郊外のルンビ、ニー（藍毘尼園）という花ぞので生れられた。王后は、とりどりの花の咲きそろふこの花園を訪づれて、一入きれいな無憂樹の花を、取ろうとせられたとたん、おもいもよらず全く急なことで、玉のような太子の産聲は、花さき鳥

うたう天地の眞只中に、この人の世に擧つたのである。これが佛の出現であろうとは、誰あつて知ることができたであらうか。

日本の寺々では、釋尊の誕生を記念して花御堂をしつらえ、蒲公英、蓮華草など、種々の花で屋根をかざるのは、この花園での誕生に基くのである。また御堂の中央の誕生佛（天地を指さす嬰兒の立像）に、甘茶の湯をそそぐのはその時に龍神が香湯の雨を降らして、太子の身にそそいだという傳説に由來するのである。明治時代からは、東京の日比谷をはじめ、全国各地の公園などで、四月八日の櫻さく頃、「釋尊降誕、花まつり」が行われるようになった。廣い大空の下、大勢が一しよに大地をふんで祝うこの行事はまさに花園の佛誕記念にふさわしいものであるであらう。

○

太子は生れると、すぐ七歩あるいて天地を指し、天上天下、唯我獨尊。

と叫ばれたという傳説がある。これは後日に、無上正覺を成就して佛となられた、その佛の心を、誕生の時の言葉としたものと見てよいであらうが、ここでは、人の生れるめでたさを告げる語として、この叫びを味わつてみようと思

う。

考えてみると、天地の間にある物で、尊からぬものは一つもない。天空にかかる太陽や月は無論のこと、聳える山、流れる川、さく花やなく鳥など、一つとして、他の物の追隨をゆるさぬかけがえのない、そのもの独自の位置において、すべて宇宙を生成する要素でないものはないからである。春をのどかにするのは、何も櫻に限つたことではなく季節となれば、萬物はこぞつて莊嚴する春である。雑草やばい菌などは、なくてもよいようであるが、肥料不足には大切な堆肥であり、ペニシリンは餅の青かびと同類であるし、豫防や治療のためのワクチンは病原菌から作られることを忘れてはならない。

こうなると、尊からぬものを尊くする、つまり物を「扱ふ」ことが加わつてきたが、自分の好きなように、ものをとを能力をもつてゐるのは人である。全く人の外の何物でもあり得ない。それもただ、ある物だけを扱うのではなく、無いものを考えだしたり、作つたりするのが人である。昔の人が、夢にも見なかつたと思われる世界に、今の人たちは住んでいる。しかもその扱い方となれば、各人には独自のものがあつて、他の企て及ばぬものを具えている。こうした人々の「扱い」こそ、宇宙が生きている動脈であるこ

扱ふ思えば、人一人の存在が、おろそかならぬものである、ことがわかるであろう。ここに、全然新規な扱いをするであらう一人が、生れ出るめでたさは、思い半ばに過ぎるであらう。釋尊誕生の叫びは、こうした自主的な知覺を告げるものと思う。

自主的というのは、自分だけがお山の大将になることではない。佛を、一般人から遠く離れた大聖人として、一にも二にも方外な存在とするのは、佛をお山の大将に、まつり上げた形で、之は小乗の見方である。そのように佛を固型視することを改めて、釋尊は何をどう扱われたかを、凝視したのが大乘である。そして、人間と彼れの住む世界のまさにあるべき姿を、身をもつて立證されたのだと感知した。これは人間群の先頭に立つ佛の發見であるとともに、あるべき姿の實證は、釋尊一人に止まるのではなく、わが身の如實なる一扱い一によつて、人から人えとりレーされる。ここに、萬人に委ねられた佛があるのであり、大きく眼を開いて、人間を見る人々の胸には、つねに新たに、そうした佛の誕生はつづくのである。

悠久なる人生を通じて、平和と自由の擴充に、更に新たな「扱い」の、どこまでもつづく佛こそ、大聖の眞に大なるゆえんである。

庶務からお願い

◇會友の増加に伴つていろいろのお問合せが相ついで、庶務では嬉しい悲鳴をあげています。殊にその中で、前號から揃えたいとの御申込が多いのですが、新年號は増刷にも係らず残部が全然ありません。遺憾乍ら御希望に副えませんが、今後の一層の發展を御期待下さつて御愛讀願います。

なお復刊後の分では昨年九・十月も残部なしという状態です。

◇本月號から新年號以來の會友の方々の要望もあり、更に内容の充實と飛躍を期して増頁を斷行、この調子で堅實に進展して参ります。就ては定價改訂を御諒承下さい。新定價は一部二十圓・一年豫約二六四圓(送共)既に御拂込の分は改訂により清算してまいりますから、前金切の御通知が参りましたら御拂込下さい。(振替東京八二一八七番)

◇お斷わり 好評の「淨土教の本質」第四講は、眞野先生の御病氣により本月は休載いたします。

春は明るい新装から

淨土を愛讀する大正大學をはじめ佛教大學の學生層に人氣のある

日の出屋洋服店

大學高專服の御註文・補修更正なんでも親切に奉仕いたします

豊島區西巢鴨四 電大塚二五〇七

迷信の科學

竹中 信 常

一
最近の二三年このかた、新しい色々の宗教が澤山に出来た。中には立派なものもあるが、その大部分は、病氣をなおしたり、死んだ者の魂を呼び出したり、吉凶を判断したりする丈けのことで、大勢の人を集め、澤山の金銭をおさめさせているようである。

宗教の力で、病氣がなおれば醫者は不用であるし、死んだ者と話が出来ればラジオもテレビジョンも必要がない。自分のこれから先の運命、吉凶がわかれば、早手廻しに用心さえすれば、貧亡にもならず、死にもせぬこととなつてしまう。極端にいうなら、このようなものが宗教であるのなら、人間は宗教さえ持つていれば、政治も經濟も道德も學問もいらぬのではないだろうか。

本當の宗教とは、こんなものなのだろうか。私達は、現在のように入々が色々に迷ひ、様々の方向に勝手に動きまわつてゐる、混亂の時代にこそ、本當の宗教をはつきりと示めして行かなければならない。それには、差し當つて、本當でない宗教偽りの宗教とはどんなものであるか、ということ、即ち迷信の何たるかを、はつきりと擱んで置くべきである。

二
迷信は、色々の原因から發生する。

一、自己に直接利害關係を持つ特殊な事柄をひろく一般化する傾向。例えば、入學試験をうけに朝家を出ようとしたら靴の紐が切れた。處がその試験に落第してしまつた。という靴の紐が切れたために試験に落第したのだと思ひこむ。又、醫者にかゝつても仲々なおらない病氣が、人にすゝめられてお地藏さんに願をかけたら癒つた。そうすると、あのお地藏さんはこれこれの病氣にきくと、自分も信じ人にも話す。そしてそのお地藏さんをお醫者さんより病氣をなおすことが上手だとて、醫者を無視する。向島の牛御前が瘡癤にきき、淺草のカンカン地藏が腫物にきくといわれるのもこのためである。病氣の場合丈けでわなく、火事よけに腰巻をふつたり、夢で吉凶を判断するのも同様の理由からである。

二、意味や語音の類似してゐるものを結びつけてしまふ。板橋にある有名な「縁切り榎」がこの代表である。もともとこの樹は、榎と楓との二本の樹だつたのが、兩方が大きくなつて幹と幹がくつついてしまつたもので、外からみると一本の樹に見えるところから、

エノキとツキノキを合せて「エノツキ」と呼ばれるようになり、エノツキはエンツキとなり「縁盡き」に通ずるところから男女間の「縁切り」に轉用されたのである。男の厄年四十二が「死に」に通じ、女の厄年「三十三」が「サンザン」に通ずる處から忌まれるのも、語呂が似ているからである。意味の轉用の例としては、東京芝三光町立行寺内にある大久保彦左衛門の墓が、試験合格にききめがあると思はれることが擧げられる。人も知る彦左衛門の横紙破りから、「無理をとおす」となり、更に試験にパスするといった具合のものらしい。

三、異常な出来ごとを自分達の生活に結びつける。日蝕・月蝕・地震・津浪などが何か悪いことの前ぶれとされる如きである。又、白蛇を神の使者であると考えたり、奇妙な形をした物、千年の老樹などを神聖視して、これに色々の願掛けをしたり、祈念したりするのがこれである。

四、先入觀念に支配される。というのわ、人から聞いたり、ふつと自分で感じたりしたことをいつまでも心に抱いて、何かにつけてこの考えでもつてものごとを律してゆこうとすることで、狐にだまされる、などというのは大抵これで、前に誰々がここいらでだまされたのだと思うと、その附近を通ると自然その氣になつて、錯覺を起こしてしまふ。人から「あの巫女のいうことはよく當る」と聞かされて、その巫女の處へ行つて色々のことをきくと、はづれていることの方が遙かに多くても、それには餘り氣がつかず、偶然に一致した點丈けが特に印象に残つて、「成程よく當るわい」と感心する例は世間によくある。

三

こまかく見れば以上の外にも、迷信の發生する理由はあるだろうが、大體は以上の如くである。ところで、それでは、何故このような理由があるのか、言いかえてみれば、何故人間の心に、このような迷信を發生させるような傾向があるのか、というと、それにもまた二つの理由がみられる。少々むづかしい言葉であるが、

一は 感情的思考

二は 希望的思考

ということになる。

感情的思考というのは、ものごとを考えたり、判斷する場合に、冷靜に、精確に、理窟通りに順を追うてするのではなく、自分の好惡の感情から、或種の事柄を無視したり、反對に一部の事柄を過大に評價したりすることをいうのである。これは、人間が感情の動物であるといわれる以上、生れつき持つてゐるやむを得ぬ性向であるが、教養とか常識とかを身につけ、知識を働かせれば防ぐことの出来るものなのである。最近流行している「靈媒」又は「口寄せ」即ち、他人の依頼に應じて祈禱し、神がかりの状態に入つて依頼者の死んだ親族や先祖がのりうつたといつて、色々の「おつげ」「宣託」するのを見てみると、その大部分は見當ちがいのことをいつてゐるか、さしさわりのないありふれたことしかいつていないのだが、聞く方の心が、相手にとらわれていて、そのいうことが何でも本當だと信じたり、又、ちがつてゐることは氣にならず、偶然に當つてゐることだけが特に印象深く感じられて、いうこと全部が本當だと思われるのである。實例を上げてみると、「お前の家の三代前に變死したものがあつた。その靈が祟りをしてゐるから、病氣がなおらないのだ」といわれて、あわてゝお寺へ行つて過去帳を繰つて貰つたり、

親類の老人の處へ行つてみたりすると、成程三代ぐらい前に、子供が一人井戸に落ちて死んでいたというので、今更、よく當るわいと感心もし驚きもしながら、他の佛様はそつちのけにして、その佛のことばかり一生懸命に供養したら、いつとわなしに病氣がなおつた、などという例は屢々聞かされる。これなどもそうで、一軒の家の家系などというものは、それからそれと洗つてみれば、随分澤山の親族があるもので、従つてその中で一人や二人が變死しているのは當り前で、むしろ變死をしたものがない方が不思議なくらいである。それも、三代前の誰々が、というふうに名さすのならとに角、漠然とたゞ三代前といわれれば、曾祖母の實家のに嫁に来ていた人の弟だつたとしても三代前に當り、こんなのを數に入れたら、それこそ何十人、何百人がすべて三代ぐらい前の親族になつてしまい、當然一人二人の變死者があることになる。ところが、當人は頭からよく當ると信じているのだから、この當り前のことが當り前でなく感じられ、感心したり驚いたりするのである。そして一生懸命に供養をすれば、精神的に氣が樂になり、あちこちと出て歩くようになれば少しぐらいの病氣なら、癒つてしまうのも、これまた當り前のことである。

次に、希望的思考というのは、こうなつたらいいなあという氣持が強く作用しているうちに、自分の思想がこれに支配されてしまふことをいうのである。人間誰れでも希望なしには一日といえども生きて行くことは出来ぬが、さればといつて、ただ「あゝしたい」「こおなりたい」とばかり考えていたのでは、實際の生活がお留守になつてしまふ。ところが、これがひとたび精神的な、宗教とか信仰とかといつた世界にはいると、現實の日常生活ではとげられぬような

希望を、宗教とか信仰の中で實現出来ると考えられがちとなるので所謂、魔術とか神話とか、或は千里眼とか天國旅行とかといつた、奇想天外なことはすべてこのような理由から生れたのである。これも具體的な例を挙げた方が分りやすいから、一つ二つ例を引いてみることにする。昔よく行われた「丑のとき参り」というのがある。女が戀仇を呪い殺そうと決心して、眞夜中に、頭に蠟燭を立て、一本歯の下駄をはいて、鎮守の境内の老樹に、戀仇をなぞらえて作つた藁人形を釘でうちつけに行く。そうすると呪われた相手が狂い死にをするという迷信。これは、相手を殺して戀人を獨占したいという、強烈な希望から生まれたことで、尋常一樣の手段では目的がとげられぬために、このような恐ろしい手段を選ぶに至つたのである。これに限らず、一般に「まじない」といわれている色々な手段も、すべて、こおしたいという心持が高まつた結果出て來たものである。或はまた、旅行に出る時に日の吉凶を見たり、無邪氣なところでは子供が遠足や運動會の前日に、テルテル坊主を作るのも、みんなこのためである。旅行に出ても無事に歸つて來られるようにという氣持、その氣持に何かはつきりした證據がほしいために、「大安」の日を選ぶことになる。「明日天氣にしておくれ」という氣持、これが子供にテルテル坊主を造らせる原因となる。

四

少し理性を働かし、落ちついて考えてみれば、すぐわかることであるのに、思いつめたり、迷つたりすると、ものごとは正確に判斷することが出来なくなる。迷信がそおであつて、わきから見ると實に馬鹿げていて、理窟に合わぬことでも、御本人は、上に述べたような氣持ちに支配されているために、眞面目になつてこれを信じて

いるのである。だから、一生懸命になつているときには何といつてきかせても無駄で、反つて火に油をそぐような逆効果を生む。それよりは、遠まわしに、ジクジクと、その人の感情的な考え方、希望的考え方をなおして行くより道がない。それには、その人の一般の教養を高め、ものごとを正確に判断するだけの知識を養つてやるのがよい。よくいわれることだが、迷信邪教には、案外インテリが多くひつかゝるものである。例の鹽光尊に吳清源が熱中する。女子大出のインテリマダムが靈媒の所へ行く。成程、これ等の人々は色々の學問をし、或は知性も發達し、教養もあるだろう。が一番大切なものが缺けている。それは、「宗教的常識」である。佛教の教養をひと通り心得ていれば、死んだものが出て来て口をきく道理のないことは明かであり、念佛信仰をしつかり持つていれば、病氣になつても、平靜に醫者のいうことをきいて療養することが出来る。ところが、大學の先生だ、役所の局長だという人々でも自分の専門のことで、或は理窟めいたことは人一倍達者だが、ひとたびこの「宗教」や「信仰」のことになると、まるで赤ン坊のように何も知らず、又平常何でもない時は、そのようなものを馬鹿にして知ろうともしないが、一度、子供が死んだり、不治の病氣にかゝつたりして、ふと「宗教」の世界にはいりかけると、わけもなく信じこんでしまうものである。だから、その時に、選びかたをあやまつて變なものを信ずると、それが高じてインチキ宗教家のくいものになつてしまう。

宗教とはあくまでも「精神的」なものである。病氣がなおつたり金があるのは、心を明るく持つて、元氣よくニコニコと働くからであつて、すべて「精神」を通じての効果である。決して宗教そのものが「薬」の代りになつたり「寶くち」の役目をするのではないのである。

皆さんのところへ最近次のような「幸運のくさり」という英文の手紙が届きはしませんでしたか。これは十年程前にも流行つたものですが、結局人間の「幸運を待つ心の迷い」なのですから氣にしない方がよいと思います。

幸運のくさり

譯文この幸運のくさはりは、私に送られてから七十二時間以内に投函したものです。これはかつてド・ゴール將軍麾下のフランスの一士官がアフリカから發信したもので、全世界におよびつゝあります。このくさをりを斷ち切つた人はきつと惡運に見舞われます。此手紙を持つていてはならぬ。これを受けとつてから七十二時間以内に郵送しなければならぬ。フイリッピン軍の一兵士は、このくさに加入するや、まず第一に幸いを得た。故ルーズヴェルト氏はこの手紙を投函してから五十二時間にして、第三次大統領に再選された。このくさをりを切つたロメロ大將は此手紙をうけとつてから七十二時間の後に死んだ。この幸運のくさをりを一笑にふしたバギオ市に住むヴィラニユーという人は、一九四八年六月十四日に不慮の死をとげた。

注意、最初の名前を消して最後にあなたの名を加えること。

これと同文の手紙を十二通つくつて、十二人の友達に送ること。此手紙をとどめぬこと。尙、下記の表にある人は既に済んでいるから、これには送らぬこと。(以下、十五名の名前をあげてある――編集者のところへ來たのには第八人目までは外人名で、あとは日本人の名であつた)

正しい信仰へ

中村 康 隆

敗戦後の私達の生活は依然苦しい。不安と混亂、そのものだ。この現實から多くの迷信邪教がはびこつて来る。このことは、將來精神文化を高めることによつて國の譽れを得ようとする我が國としては、特に悲しむべき傾向といはなくてはならない。

元來、宗教は日常生活とかけ離れた特異な心的態度でもなく、まして非科學反科學のもでもないのである。それは敬虔な意識に基く日常生活の淨化であり、平凡ながら健康な人間性を豊かに麗しく育て上げてゆくものである。いわば人間生活の完成である。

然るに、信念なく我欲にひきずられる人は、正しい生の伸張を忘れて迷路にさまよい、いかゞわしい信仰のとりことなり遂には祖先傳來の正しい信仰すらなげうつて、邪信の手段によつて現實の御利益を追求めるようになる。そして恰も神風にたよつて敗戦の憂目に泣いたように、やがては自己の愚を嘆く日が来るのである。正しい現實の努力によつてのみ正しい現實の利益がなくてはならない筈である。拜めば病氣をなおしたり金をもうけさせるような神は邪神でしかない。拜まぬものにはアタをするなどは、まして心のせまい醜惡さ以外ではない。神佛の心は平等の大慈悲そのものの筈である。

勿論新興の類似宗教にも一分の理は存しよう。多くの人はその一分の理にひかれて九分の邪義を見のがしてしまふのである。そして誤つた信仰にとりつかれるようになる。

例えば近時靈友會の運動とかいうものがある。アナタ方の病氣その他の不幸は、祖先の

運

一人の女がいた。彼女は一生を安樂に暮せますようにと、清水の觀音に願をかけて參籠した。そして夢の満願の日に一人の男に身を任せた。男は綾十匹、絹十匹を女に與えた。だが男は盗人であつたことを覺つて知人の家に逃げこんだ女が、往來の騒がしさに戸の隙間から覗いてみると、繩にかゝつた男が曳かれてゆくところだつた。それがさきに身を任せた男であることを知つて女は泣いた。——しかしいまでは女はその綾や絹を賣つたのを資本にして、何不自由のない身の上で暮している。——

これは芥川龍之介の「運」という小説の筋である。一體このような「運」を私たちはどう考えるだろうか。

この物語をきいていた青侍は、運がどの様なものであつたにせよ「とにかくその女は仕合せ者だ……お翁さんもそう思うだろう」という。この物語をしてきかせた「翁」は「手前でございますか、手前なら、そういう運はまつびらでございますな」

私たちの批判は、この「運」について、青侍の側に立つか、老翁に組するか、どちらだ

崇祀をおろそかにした罰であるから、戒名をよくして祭りを盛んにせねばいかぬと稱し、勝手に戒名を改めたり、過去帳を賣りつけたり、從來の位牌迄も片づけさしたりするということである。子孫として、祖先の祭祀を厚くせねばならぬことは當然である。しかし、祖靈の安まる菩提寺の信仰の下に祀つてこそ祖靈の安らぎはあれ、位牌を片附けたり、勝手に戒名をつけたりして正しい祀りを廢することが何で祖先崇拜の實となろう。のみならず孫は子よりも可愛いゝのが情である。まして子孫の繁榮を願つても、それに禍を受ける祖先はない筈である。一見して明かに邪義邪行であるのに、これに乗ぜられるというのは祖先崇拜をおろそかにしてはすまぬという傳統の信仰を利用し、人情の弱さにつけこんだ勧誘に、つい善いということならしてみようとして反つて祖靈の意に反する結果となるのである。お光様とか光明教又は日本觀音教などという、混亂した教旨と儀式でデッチ上げた宗教のオサスリにしても、正しい醫療を疎害して問題となつてゐるが、これも觀音信仰を利用しての宗教で、光明如來などと呼ぶ掛軸を賣りつけてゐるが、それでは觀音菩薩の眞の姿は滅却されてしまふであらう。所謂人の道のオフリカへにしても、神の愛が他人の苦しみに代ろうとする大愛であることは、イエスの十字架や觀音の大悲受苦の思想でも明らかだが、それを信ずるものゝ正しい社會愛の生活態度として現われることが大切である。睦み合いと助け合いを忘れて人の道はないのに、神に許り愛と犠牲を求め、自分の苦しみを除いてくれるものとして熱中するから、正しい醫療と生活努力を害う邪教となるのである。躍る宗教にしても、體操と舞踊を生活のリクリエーション休養とするのでなく、踊る法悦だけに止まるところに一步外せば邪な快樂への耽溺となつて、正しい生命の道が見失われるに至るのである。

要するに正しい信仰には健全な常識と明朗な生活態度が伴うものであるのに、迷信と邪教には一分の理があつても盲目と無自覺とによつて正しい宗教生活を昏迷に導くものである。我等は飽迄正しい信仰にすゝまなくてはならない。

ろうか。近頃はやりの闇にせよ、賭にせよ、あるいは一獲千金の寶くちの夢にせよ、訪れてくる「運」を現在のわれわれの周圍の問題におきかえてみればよい。「とにかく仕合せ」と思うか。「まつびら」といゝ切れるか。私たちは、とにかく外に多くを求めたがる。しかし私たちは内に生きる眞實を信じ、その眞實の命ずるがごとくに生きてゆきたい。

醫者と山伏

徳川時代の「甲子夜話」という本にこんな話が出てゐる。或る病人の家で醫藥治療のお醫者と、祈禱によつて癒すという山伏とが鉢合せをした。お互に病氣の全快は自分たちの手腕の結果だと主張して譲らなかつた。

最後に醫者は一つの提案をした。それは山伏は祈禱で醫者を呪殺したらよい。醫者は一服盛つて山伏を殺してみせよう。どつちが、勝利を得るか、一番早いではないか。

そこで山伏も今の元氣はどこへやら全く辟易して逃げ出したという。この話は徳川時代のことではあるが、このようなことは近代的に姿をかえて現在でもあちこちに見られるとおもう。老病死はいつの世でも私たちにとつての人生の苦惱にはちがいない。しかしその苦惱をどう解決するかは問題であらう。

文 部 省 に

新 興

宗 教

を 聞 く

文 部 事 務 官

楠 正 俊 談

新興宗教特集

春四月、樹々には柔かい若芽が萌える。人の心ものびやかになる。猫すら鼠をとるのを忘れると漱石はいつている。ところで、芽をふくのは木ばかりでない。憲法改正という春に逢つて宗教畑にも澤山の新芽が出た。雑種か雑草かとにかく勢よいのもあつて、そろそろ若木になりかけているものもある。一日、春とともに元氣ついたこれ等の若芽の状勢を、文部省宗務課の一室に、楠正俊事務官を訪れて、診断して貰う。

届書類、調査書等一面にひろげられてある楠氏の机上には、昨日調査したばかりだという心霊界教會の書類が目につく。早速に

「新興宗教の数は」

と、話の本筋にとび込む。

神道十三派、これが終戦までで、その後に出たのが百十二、佛教は通稱五十六派が五つへつて五十一だつたのが、百二十二となつて七十一の増加、キリスト教は五つだつたのが現在は二十。宗務課のリストでは「その他」となつて、神佛基いづれにも屬さない、これこそ正真正銘の新興宗教と呼ばれるものは、在來の零から、現在は三十八を数えている状態です。

「零から」とはいうものの無論そこには何等かのもとがある。無からの創造というわけではなく、矢張り佛教、神道からの、いわば「鬼子」として、元親から勘當された形のものが多い。それだから、その教義なり儀式なりをみると、必らずそこに、佛教か神道の匂いを持つてゐる。いやむしろ匂いどころが、そつくりそのままとつてゐるものの方が多いようです。

楠事務官はまづ宗教界現況を數字的に示された。

「それではひとつ本論に入つて、その新興教團の内容を紹介下さいませんか」

各教團といつても、今いつたように三十六以上もあるのだから、一々これをいうわけにはゆかないが、まあ極く代表的な、而も調査済みのものを二三拾つてみませう。

第一が例の「躍る宗教」で一躍有名になつた「天照皇太神宮教」これは以前は神道的だが内容は、神道、佛教、天理教（天理教も神道だが）のあいの子みたいなもの。新聞社などのもとめがあれば、數寄屋橋公園でもまづ躍つてみせることもあるが、原則としては先に祈りがあつて、その結果おどり出すので

ある。信徒二十萬と稱し、その本據は山口縣熊毛郡田布施町、只、極めて質實な實踐性を持つてゐる點で、他の多くの類似教團の中で異彩がある。

「神道から出たので代表的なのは」

東京、三田四國町二の六四にある心靈界教會これが非常に特色がある。會長は立島榮三郎といつて三十歳ぐらいの、一見漁師上りといつた人物。この人物を「恩師」と稱し、祭神は御多分にもれず「天照大神」而も神は「正中にあり」とて、人間が正しき在り方さえすれば神はこれにありとする、いわば極端な「人間教」です。正しくあるためには、これまた神道から借りものの大謨いをすればそれでいいので、これ丈では何の變哲もないが屈出信徒十萬、實數はそれを上まわつてゐるという、この魅力ですね。どこにあるかとゆう。宗教の世界でもえらくなりたいという。人情は通用しますよ——楠さんは記者の顔を見て笑う——。これを巧みに利用してゐるのがこの魅力の原動力。會長は恩師であり、その下に「教師」がいる。そして、信徒は「祭司員」と呼ばれて、自ら宗教的行事を司る。自分でやつてみたいという心をつかみ、利用し

て行く。信徒は祭司員として、自分で大謨いをし、一緒に行事する。佛教などには一寸思いつかぬところでせう。更に、祭司員は昇格して教師にもなれる。

この會の魅力はここにあるが、これと共に字の分解説明ということもまた人氣がある。

「從」は人人の下に止まるのであり、あくまで人々の下位にいて奉仕することだ、といった調子のたあいのないものだが、一應の理窟さえ通れば信徒達には文句なしにありがたいものと感じられるらしい。もう一つ、此會の特色は、掛軸やお札を賣るのに純然たる商賣行爲をむき出しにする。宗教宗教といつて金がなくてはどうにもならぬ。よその教派では金儲けは陰にかくれてしているが、決してかくすべきではないというわけで、堂々と賣りつける。これが案外逆効果を示しているようです。

「金もうけの點では、例の觀音教なども隅に置けぬようですが、どんなものでせう」

「日本觀音教團」が脱税でひつかかつたのは法人と個人とを混同したためです。ところが新聞に出た熱海の「日本觀音教團」はも早や變革してしまつていますよ。これは最も新し

いニュースだが、三月一日に、熱海の日本觀音教團は分裂し、熱海には志保澤武を教祖とする一派が残り、脱税問題の立役者澁井總三郎はこれから出て五六七會(みろく會とよむ)というのを世田谷の玉川上野毛一一〇の廣莊な邸宅に組織し、むしろこちらの方が本據になつてゐる。これには二二六事件の「兵に告ぐ」の大久保少佐その他舊軍閥古手軍人が歸依している。

澁井はもと新宿と神田に洋服の古着を商み仲々商才のある人で、祭神は觀音(光明)とやらたらに大黒天を祭る。これは財運の神だからでしょう。教理の根本は「靈波」というので、人間にはそれぞれ靈波といつて固有のエネルギーがある。これが正常でありさえすれば病氣にも不幸にもならない。病氣の時には教祖の掌から出る靈波をうければよい、という。これが例の「光明觀音」の原理です。ところが靈波は人體のみでなく萬物凡ゆるものに作用させることが出来る、即ちやせた田畑も靈波によつて收穫をあげることが出来るなどといつてゐるが、これは生産増強の面からいつて一寸面白くないようだ。信徒は主として職業では漁、農で地域では神奈川、静岡、東京が壓倒的です。

「最近佛敎界では檀家が靈友會に入つて位牌や戒名をやたらにいぢくつて困るという問題が出ていますがどんなものでせう。」

いままでの神道系とちがつて日蓮系のものに靈友會があるが、靈友會は東京港區麻布飯倉二の四に本部があり、小谷きみを主管者とし法ヶ經を中心敎義としている。いうところは要するに、先祖を大切にすること、それには位牌を大切にすること。人界はすべて靈界によつて影響されていて、靈の不和が人の不和の原因となる。病氣もまた靈のために起る靈は位牌に宿つてゐるから、位牌には必ず水と花を供え、朝晩おつとめをせよ、という。ごく幼稚な先祖崇拜といったもの。會費は三圓會費は安いが經本を賣つたり珠數や袈裟を賣つて相當の利益をあげる。精神的な無形のものよりは、よそで買えば一圓のものを十圓に賣つても、何か形のあるものを交換にくれれば信徒は何とも思わぬらしい。その點坊さんなどは悪くいうと商賣が下手のようだね。

とに角、會費の安いことと、不斷に勤行して、信徒は參詣さえすれば常にお参りが出来るということが引きつけられるところ。無形の靈を位牌という形にあらわしていると、敎養の低い人にうなづけるものがある。

るようだ。

この靈友會から出て仲々さかんなのに杉並區和田本町に本部をもつ**立正交成會**とゆうのがある。主管者は庭野日教という四十歳ほどの牛乳屋上りの人、それに長沼妙佼という六十ばかりの尼さんの二人。これは、男女夫婦とは限らぬが陰陽ではじめてものごとが完全になるという敎義から來てゐる。かつて「ひとのみち」も陰陽二元論をもつて、大いに「夫婦相和し」をやつて問題を起したが——庭野の方は「理」を、妙佼は「事」をうけもつてゐる。

庭野が牛乳屋をやつたというのにも一つの動機があつて、人間の不幸、災い、なやみのもととは病氣にある。病人のあるなしは牛乳屋が一番よく分るというわけなのだ。だから、交成會も病氣もなおすということを中心として、それに生命判斷がつけ加わつてゐる。靈友會系だから當然位牌を重要視するが、その上に戒名もまた一定の法式によらぬと不幸になるという。字劃の奇數を陰、偶數を陽として奇數・偶數・奇數・偶數という風にせねばならぬ。だから寺でつけた戒名でもこの法式に當らぬのは不幸・病氣の原因になるといつ

て、どんどん改めてしまふ。戒名だけでなく生きてる人の名も改める。信徒には姓名判斷とか戒名を改めるとかといつて、ばきばきとやるのが案外暗示的に作用して、効能があるよう感じられるらしい。この奇數、偶數の陰陽の凝つて一體となつたのが南(七)無(十二)妙(七)法(八)運(十三)華(十四)經(十三)であるという(カッコ内の數字は字劃)だから儀式には題目をとなえる。それも仲々盛んにやる。結局、名前を變えて位牌を大切にせよ、それだけである。

信徒は敎養の低い層で、東京に多い。會員獲得の方法は、先の心靈界敎會の組織をもつと徹底させて、信者が自分の近所のものを少し勧誘すると、これを分會と稱してその先生になれる。誰でも先生になりたいから、一生懸命信者獲得に努力する。分會の先生は分會員を引つれて本部に行き、廣間の一隅で自分の分會に説教する。廣間にはあちこちにこのようなかたまりが出来る。その場合、特に御出座を求めぬ限り、庭野や長沼は出て來ない。これは分會の小先生の自尊心を満足させ且つ自分の分會を他の分會よりよくしようと一生懸命にさせるのに極めて効果がある。いやでも分會は多くなり、且つ信徒は増してゆ

くとゆうわけです。

「すると新興宗團は大概似たりよつたりというところですね。だがその中で何か他に毛色の變つたのはありませんか」

毛色の變つたという程でもないが、少々他とゆき方を異にするものには、在家日蓮宗淨風會というのがある。これは本部を新宿區東五軒町二の二一三に置き、日蓮系丈けに拍子木、大太鼓、小太鼓をつかつて盛んに題目をとなえる。それも一心不亂にとなえて、自己催眠の状態にまでなる。ここまでは大して變りはないが、ただ會長の山崎廣吉という人が一風變つた人で、例の九段の野々宮寫眞館をやつていて、寫眞技術が非常に上手だ。そして寫眞を通じて藝術の極致と宗教とは一體であるという信念を持つており、此點PL教團と似たところがある。従つて比較的眞面目な態度であり、「在家」と銘を打つてゐるだけに商賣的でないところ、少々清新な感じがするね。

「いや、どうもありがとう存じました、おかげで新興宗教というものの大體のアウトラインははつきりしました。ところで、結論的に

いつて、あなたの御感想はどうでせう。」

文部省としては憲法改正に伴つて、各宗團の自主性を尊重する建前から、屈出のあつたものは受理し、その内容については干渉しない。だから、われわれがみて随分あやしげなものでも、一應形がととのつていれば宗團として認めてゐるわけである。

ただ次の點にだけは深い注意を拂つてゐる。即ち、占領政策に反するもの、治安維持を亂すもの、醫師法に違反するもの、こおしたものは取締ります。醫者にかかることをとめたり、私製のくすりを賣りつけたりすることは嚴重に見張つてゐる。また、社會不安をおこすような言動にも注意しています。例えば先頃の璽字教のようなもの、或は維新連盟などといつて、舊帝國主義を根本として「天下の實力」を抜いて世界を改革するなどといつたたぐいのものは、これを解散させてゐる。ところが、今度醫師法が改正になつて、溫災、指壓、はり醫等の資格の再しん査が行われることになつたが、この試験に自信のないものや資格のないものが、逆に宗教宗團の名をかりて無資格でやるといつた傾向にありこれは充分に警戒しなければ危険である。

最後に、新興宗團を概観していえることは

大底の教祖は小學校程度の教育しかなく、屈書などにも誤字脱字が澤山あるような仕末だがそれでいて多くの信徒を得てゐるのは、それが生活に即した悩みを解決するという看板例えば病氣、家庭不和、貧乏等に對する現世利益を目標にしていること、教義が非常に簡單で當り前のことをいつてゐること、形のあつたものを與えること、信徒の自尊心をうまく利用すること、などがその原因といふことが出來よう。要するに、現在の社會不安にあえぐ人々の、一時的・現世的慰安を與えるといふ點で人氣がある。然し、少し教養があり、批判力ある人は直ぐに倦きてしまつて、またもとの宗教に歸るといつた傾向が強い。これは當然でせう。(文責在記者)

——記者は新興宗教のその實古風舊態なのを感じながら文部省を辭した。一步出れば科學の世界が明るい。

會費増額についての

お願い

昨春以來一ケ年、諸經費の驚異的暴騰にもかゝわらず、本誌普及のため低廉なる信仰雜誌として、齒を喰ひしばつて堪へて來ました事は、親愛なる會員諸君もすでに御了解のことゝ存じますが、もはや今日に至つては全く不可能となりました。その上何分僅々十六頁の狭い紙面では御期待に應ずる内容も盛り切れず、こゝに會議の末二十六頁に増頁を斷行し、會費も一部金二十圓と改正するの止むなきに到りました。何卒この事情御賢察下され、この上とも御熱授のほど切に懇願いたします。

猶本誌は都合上やゝ豫定の頁に足りませんが、來月からは二十六頁、表紙別刷の生れ變つた姿で御目にかゝれる豫定であります。

芝園だより

◇陽春四月の聲をきくと、暖冬であつたにせよ、また自ら全てに新裝出發の感がある。佛教各界にも春の動きがそれぞれ活潑となつて古い衣を脱ぎとうとしている。願わくば、見せかけの新裝でなくて、深く今の生活の底に信仰を培うものであつて欲しい。

◇新生の最大の喜びを、釋尊降誕に求めて、大野博士の御説を味讀したい。花祭りは誰でも子供のころからの懐しい想い出をもつ。しかし之を單なる季節的行事や裝飾に終らせてはならないと思う。

◇中村博士は御専門の立場から、廣い念佛の世界を展いて下さつた。ギリシヤ人と念佛―誰れでも讀みたくなる問題である。他誌ではみられない浮土独自の隨想の頁―今月のお客様として女流俳壇の星野立子氏に御執筆頂けたことを喜びたい。會友の方々も俳句は御趣味深い方が多いと思う。(藤田)

◎ 教界の内紛と、沈滞、それに引きかえて他の宗團の活躍、これは一體何をものがたる。世間は理論としての佛教に興味を持つ人とこれとは逆に、ごく低い俗信を追う人と、この二つに分れてしまつた。中間の、本當に地についた信仰を持つた人がいなくなつた。佛教の衰退はここに原因する。誰の責任か。

◎ 新興宗教だ、邪教だと頭からきめる前に、どこが邪教か、何故人がひきつけられるのか、を充分に検討してみる必要がある。いたづらに崩れかかつた法城にかちりついて、無批判に他の惡口をいうのは、いわば老いさらばえた老人の世まいごとにしかなさない。

◎ 内に争いを含み、外に争いの目をむける、現教團は正に死の寸前。ここに内省の資料として本號を送るものである。(竹中)

「浄土」 四月號

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和廿四年三月二十日印刷

昭和廿四年四月一日發行

(定價貳拾圓)

編輯兼
發行人 眞野 正順

印刷人 春山治部左衛門

印刷所 共立社印刷所

東京都千代田區神田神保町三ノ十

發行所 法然上人鑽仰會

振替東京八二一八七番
會員番號B一〇八〇一四

會費
一ケ年 概算金貳百六十四圓
半年 金百三十二圓

(送料共)

春は新装に乗つて

大學高專服の御新調は

佐々木洋服店

大正大學出張

小修理サービス 毎週月・金曜日

補修更正は念入りにいたします

文京區音羽六丁目廿二・電九段(33)1647

大學高專服の御注文は是非

お客様本位の

石橋洋服店

補修更正は迅速丁寧に御奉仕致します



北區瀧ノ川町1941

電板橋(96)1795

石橋洋服店は
こゝです